



ヨーロッパ文明の  
コスモロ  
ジー



小林 道憲

ヨーロッパ文明のコスモロジー

小林 道憲

図版を用意いたしましたので、図版を用いてお話ししたいと思います。  
私に与えられたテーマは、ヨーロッパ文明のコスモロジーについてということでありま  
す。



第一図

ヨーロッパ文明というものを語るときに、私は、その基層文明にまで戻って考えてみた  
と思います。第一番目の図版で、イギリスの有名なストーンヘンジの画像を挙げておき  
ました。ストーンヘンジはもとは埋葬地であったのだろうと言われています。さらに、そ  
こから神殿的な要素も持ち出したのだろうと思われれます。

ここで私が特に注目したいのは、十三個のメンヒルが建っていることです。それが環状  
になっっているわけですが、その立石の意味であります。埋葬地だとすると、立石が建っ  
ている大地は、死者がそこに眠っていくところ、そしてそこから新しい生命がよみがえっ  
ていくという信仰があったのではないだろうか。

そして、高く天に向かってメンヒルが建てられているということには、天の神々への崇  
敬の念というものがあつたのではないか。つまり、立石は天と地を結びつけるものであつ  
て、いわば天上、地上、地下、これらをつなげる宇宙樹の象徴だったのでないか。し  
かも、天地人がつながるところで人は人でありうるといふ世界観があつたのではないか。



第二図

二番目の図はフランスのメンヒルですが、メンヒルは、フランスをはじめとして、ケルト人が住んでいた地に多いといわれています。これらも、ストーンヘンジ同様、高い石でできているわけです。石というのは生命の永遠を象徴していたのではないかと思います。ヨーロッパ文明の基層、新石器時代には、こういうヨーロッパ文明のコスモロジーの元型とでもいうものがある。

第三図

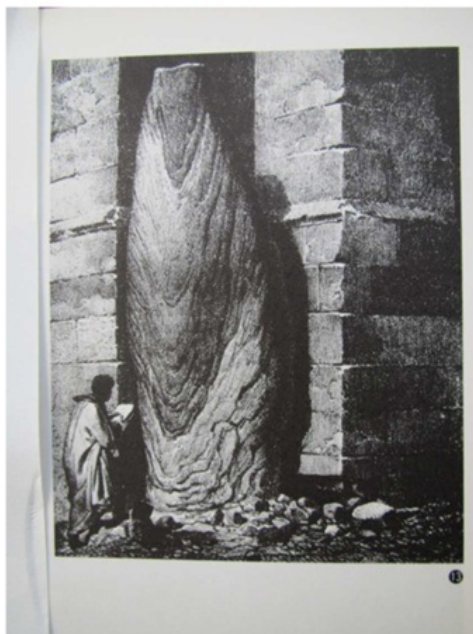


第三番目の図は、有名なケルト十字であります。アイルランドにたくさんある。このケルト十字の特徴は、よくいわれますように、十字の周りを円環で囲むという特徴です。この円環の思想というのも、生命の循環、魂の循環、再生の思想を表しているのではないかと。そこへキリスト教が入ってきて、これがキリスト教化していく。そして十字の垂直の

思想が入ってくる。しかし、この垂直線も、もとは天地人を結びつける宇宙樹であり、生命の木だっただけに違いない。

もちろん、この十字というのは、春夏秋冬の季節の循環と考えてもいいし、東西南北と回る宇宙生命の回帰というふうにも考えてもいい。少なくとも、これを対象として祈り、お祭りを行うということで、人は人でありうる。そして、人間の精神も安定するわけであり、ます。

第四図



四番目の図版は、フランスのサン・ジュリアン教会であります。ここで、カトリックの神父さんが読経をしているわけです。これは版画です。しかし、この神父が祈っている立石は、新石器時代のメンヒルだったのだらうと思います。おそらくは、これがケルトの信仰にもなっており、そこが聖地にもなり、また、そこにゲルマンが入ってきますから、ゲルマンの聖地にもなっており、そこへキリスト教が入ってきているわけであり、そういうふうには、ヨーロッパ文明も重層的にでき上がっている。ヨーロッパ文明のコスモロジーにも重層性があるということになります。



第五図

第五番目は、アイルランドの洞窟に祭られている聖母マリアであります。おそらく、この洞窟は、母なる大地への入り口であり、そこからまた新しい生命が生まれてくるという信仰があつたのだらうと思います。だから、ここで祈りすれば安産になるとか、子宝に恵まれるとかという信仰があつたに違いないわけです。キリスト教が入ってまいりますと、そこへどうしても聖母マリアを祭るようになるわけであります。



第六図

第六番の図版は、ヨーロッパ中世のころのマリア像です。ヨーロッパ中世にキリスト以上マリア信仰というものが流行った背景には、ご存知のとおり、第五図にも現われてい

ますように、母なる大地への信仰、地母神信仰、ゲルマンやケルトにまでさかのぼるような地母神信仰があつたのであらうと思われます。

第七図



第七番目の図にありますように、中世で盛んに実践された錬金術なども、大地信仰に由来していると思われます。地上では、鉱物というのは大地の恵みであります。その鉱物の中から金を作り出すというのは、神を見出すということであつて、神との合一という神秘思想を生み出すことになる。中世の錬金術には、ユングの言うように、キリスト教以前の汎神論的な世界観があつて、そこにキリスト教が習合して、錬金術のコスモロジーができあがつていくわけがあります。



第八図

そうしますと、第八番目の図にありますように、今日でも残っているヨーロッパの色々な祭り。これは上の方にはキリスト教があるけれども、結局、例えば、謝肉祭はゲルマンの春を迎える予祝行事であります。冬の神が死に、そして春の神が訪れる。それを予祝することによって、その年の小麦の収穫が保証される。こういうふうな民間信仰に根ざしているのです。ゲルマン的な記憶が、今日のヨーロッパの祭りにも残っていることに気づきます。



第九図

九番目はスウェーデンのメイポール。ここでは、冬の次にすぐに夏が来るといふ感じがあります。要するに、生命の復活。メイポールというのは（生命の木）に違いないわけで、



天の神々への崇敬の念と、大地への信頼と、それを結ぶ宇宙樹の象徴でもある。ヨーロッパの文明はそういうコスモロジーによってできている。

ただ、ギリシア・ローマ的な文化といえますか、人文主義的な学芸のほうか、今のお話では抜けております。これを加えますと、結局、ヨーロッパ文明のコスモロジーは、三層構造をしていると言えます。一番上にキリスト教的天上への信仰があつて、一番下のところにゲルマン的・ケルト的・新石器的な大地への信仰というものがあつて、中二階的なところにギリシア・ローマ的な文化、それらを仲介するような人文主義的な学芸というものがある。ヨーロッパのコスモロジーを考えた場合は、そのような三層構造になっていると考えてよいだろう。



第十図

それを象徴的に表現しているのが、ヨーロッパの大聖堂であります。例えば、フランスのシャルトル大聖堂。第十番目の画像であります。このゴシック的尖塔は、まず天なる神への崇拜の念というものを表現しております。



第十一図



第十二図

そして、中程のところには、十一番目の図にあるようなキリスト教の聖人の像があり、また、十二番目の図にあるように、七学芸のギリシア・ローマの賢人たちの像があります。

ここは、ご存知のとおり、学問の府、大学でもありました。十二世紀には、シャルトル学派が隆盛を極めたところでもあります。人文主義が中程のところにあつて、もともとヨーロッパ文明がギリシア・ローマ文化を受け入れてきた、そして文明化を果たしたというわけを示しています。

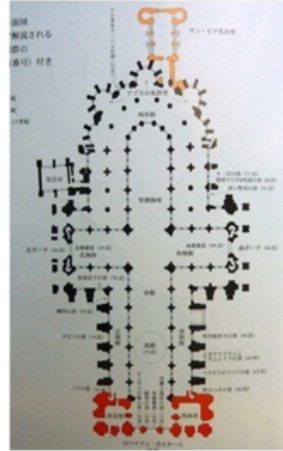


第十三図

ところが、この地下へ行きますと、地下聖堂というのがあります。これは納骨堂でありますが、そこへ死者が眠るわけであります。そして、そこにまた第十三番目の図にありますようにマリア様が祭つてある。しかも、それは黒いマリア。これもまたヨーロッパ各地にあります。スペインなどにもあります。ここで、なぜもう一遍マリアを祭るのか。それはおそらく、大地の神としてのマリアだったからだろうと思います。黒というのはなぜか。黒は、そこに死者が眠つていく死の世界を象徴しているのではないか。



第十五図



第十四図

実際にシャルトル大聖堂の地下には、もと、ケルトの泉があったと言われています。(生命の泉)があったといわれています。ケルトの聖地だったわけです。そして、そこに、おそらくゲルマン人が来て、そこがまたゲルマンの聖地になっていったはずです。ゲルマン人も、聖なる泉を信仰していたであろう。そのことがあつたがゆえに、その後キリスト教化していったゲルマン人は、その上にキリスト教の聖堂をつくり、またたくさんの信者を集め、巡礼者を集めたと考えられます。第十四番目の図は、シャルトル大聖堂の見取り図です。



第十七図



第十六図

第十五番目の図には、ヨーロッパの中世都市の代表として、チューリッヒの写真をあげておきました。都市の成立は、また文明の成立にもなりますが、そこにはやはりコスモロジーがなければなりません。教会を中心にした天への信仰と、そして教会が建っている大地への信頼。これが中心になって、都市が広がっていく。これがあると、都市が落ち着くし、そこに住むと我々の心も落ち着く。空間の秩序は、精神の秩序でもあるわけです。これが壊れると、我々の精神もアノミイ的になってまいります。

十六番目の図には、ルネサンスの代表として、ポッティチェッリの絵（春）を挙げておきました。ギリシア文化の再生です。

ただ、このルネサンスのときに、古典ギリシアにあこがれる人文主義は別として、宗教改革が同時にあるわけがあります。この辺から、先ほど申しましたヨーロッパ文明の三層構造、同時に、コスモロジーの三層構造というのが次第に分裂してきます。十七図にあるように、ルターを出発点にして、プロテスタントが出てくるわけですが、これは、中世にあったマリア信仰や錬金術を否定していきます。そして、カトリックの儀礼もどんどん簡素化していきます。そして、たった一人で聖書とともに神の前に立つという信仰を出してくるようになります。そのため、カトリックの神父さんは神と人の間の仲介者だったのですが、プロテスタントの牧師さんはそうではなくなる。罪人代表になります。

第十八図



この辺から、宗教にも分裂が生じます。そして、ヨーロッパ文明が成り立つ三層構造そのものも分裂してきましたといってしまうでしょう。特にそれはつきりするのが、十七世紀の宗教戦争であります。十八番目の図版はユグノーの迫害、フランスのプロテスタントをカトリックが徹底的に迫害している図です。ここで宗教が分裂し、結局、宗教に対する信頼が失われていく。そのかわりに、政治や経済の方が力を持つてくるようになる。プロテスタントも、また、経済の方へ力を入れるようになる。

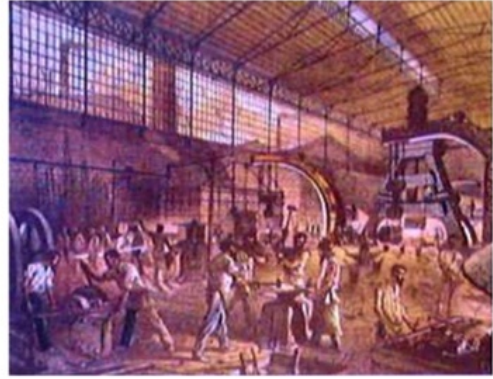


第十九図

ただ、コスモロジーに関しては、プロテスタントは、近代の自然科学的なコスモロジーの成立に貢献した面があっただろうということで、十九番目にニュートンのプリンキピアの図を出しておきました。ここでは、最初の神の一撃だけは必要なのですが、あとは機械的に時計仕掛けで動いていくような宇宙観というのが成立いたします。十七世紀であります。しかも、ここで、ルネサンス以来あった地動説の流れが数学的にきちんと理論化されます。地動説は正しいには違いありませんが、地動説の衝撃は大きかっただろうと思えます。つまり、大地が動き出した、不安定になったということです。その辺に、ヨーロッパのコスモロジーが揺さぶられてきたという面はあっただろうと思えます。



第二十一圖

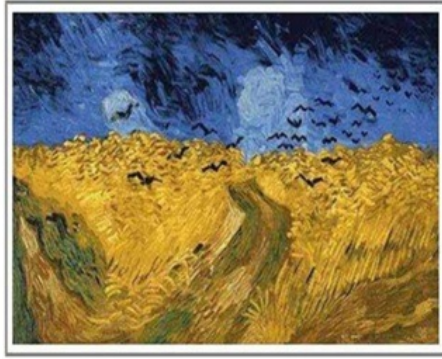


第二十圖



そのことがはつきりと現われてまいりますのが、第二十、二十一の図にありますように、産業革命とフランス革命においてです。産業革命で物資の大量生産をやつて、地球から資源を得て、それを加工、製品を大量に輸送して、大量の市場を求めていくという構造、そして、その構造にあわせるように政治構造、社会構造を解体していくという仕事があった。解体だけではだめですから、国民国家という大きな枠を作り上げていったのが、フランス革命の結果であります。

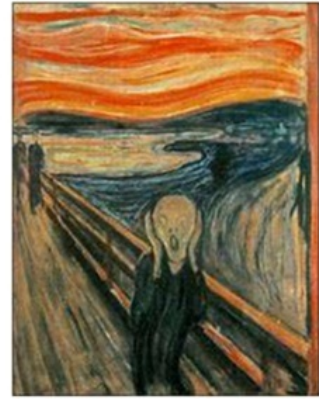
だから、この辺が大きな境目です。十八世紀の末から十九世紀、ここから、最終的に、ヨーロッパのコスモロジーの三層構造というものがバラバラになっていったのではないかと、結局、産業技術文明だけがどんどん膨張するという構造になっていったのではないかと。



第二十二図



第二十四図



第二十三図

そうすると、どうしても人間の精神は不安になってきます。それが現われてくるのが十九世紀の末で、最も敏感な芸術家がそれを表現いたします。ここに挙げました第二十二、二十三図、ゴッホの「鴉の群れ飛ぶ麦畑」(一八九〇年)や、ムンクの「叫び」(一八九三年)。これらがその不安を表現していたのではないか。そして、それは、同時に二十世紀のヨーロッパの精神的秩序の崩壊を予言していたように思うわけです。

そのことが本当に誰の目にも明らかになつたのが、第二十四図にあります。第一次大戦の惨状であります。ここでは戦勝国も戦敗国もありませんでした。ここでは、ドイツのベルダンの惨状を挙げておきますけれども、ここでヨーロッパの精神的崩壊、コスモロジの崩壊ということが起き、精神そのものも廃墟と化したという面があつたのではないかと。

第二十五図



第二十六図



そして、その精神的崩壊、コスモロジの崩壊を、例えば二十五、二十六番目に挙げたピカソの「泣く女」(一九三七年)やダリの「記憶の固執」(一九三一年)の絵は象徴していったように思われます。ピカソは対象を破壊し、ダリは存在を溶解させました。ダリなど

においては、地上世界も天上世界ももうない、地下の存在の溶解の世界だけが描き上げられました。

第二十七図



しかし、二十世紀、破壊や存在の溶解だけで済ませておけるわけではなく、建設もまたやり直さなくてはいけなかった。そのときに出来上がったのが、二十七番目の図に挙げておきましたル・コルビュジェの建築であります。徹底的に機能的な空間構成、一切の装飾を省いた合理主義に基づく幾何学的構成。一種のキュビズムです。そういうものをつくっていった。我々の目からみたら、今日では当たり前になってしまいましたが、これは一九二〇年代では革命的な建築だったわけです。

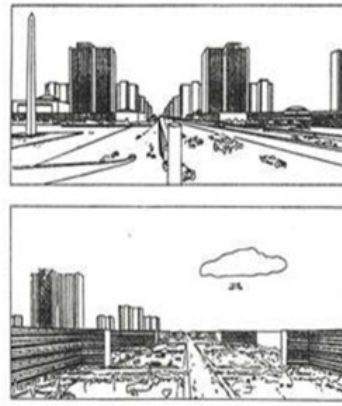


図 大都會計画圖 (ル・コルビュゼー)

第二十九図



さらに、ル・コルビュゼーは、二十八番目の図のような未来都市、三百万都市というものを構想しております。しかし、ヨーロッパではまだ伝統の足枷がきつかったために、この構想そのものは、むしろアメリカで実現したといえます。二十九番目にクライスラー・ビルに代表される高層ビルの写真を挙げておきましたが、こういうところに徹底的に機能的な建築が実現しました。この高層ビルをじっと眺め、前のシャルトル大聖堂と比べると、高層ビルの尖塔はもはや天の神々への崇敬の念を表しているとはいえないし、この建築が建っている大地というものへの信頼も失われているのではないか。現代人は現代のパベルの塔を築き上げたとも言えます。

しかしながら、それがまた東京にも、そして北京、上海、シンガポール、デリーにも、

ムンバイ、ドバイにもどんどんと建つていったというのが、二十世紀の後半から二十一世紀の初めの文明状況であります。

それで何がここで失われたか。コスモロジイが失われた。何かを我々は失ったといわざるを得ないわけで、最後にコスモロジイの喪失という問題に至りつくわけです。

ただ最後に申し上げておきたいのは、今回の東日本大震災なんかで我々が教わったことというか、大自然はああいうふうにして、人を呑み、建物を呑み込んで、そのまま沈黙をしています。我々もまた、ただ黙祷をささげ、祈りをささげて沈黙をしておりますが、その沈黙と沈黙の間で、大地が何を語ろうとしているのか。やはり「大地を畏れよ」ということではないかと思うわけです。大自然の猛威に対する畏怖の念、大いなるものへの畏怖の念というものを、これを大自然は教えてくれているのではないか。これを我々は忘れてきた。ヨーロッパの基層文明にあったような新石器文明、ストーンヘンジやメンヒル、ケルト十字でも、シャルトル大聖堂でも、やはり大地への畏れというものをもっていた。ここに、現代文明とかつての古代中世の文明の違いがあるように思うわけです。

（二〇一一年十一月十九日 第二十九回比較文明学会シンポジウム発表記録）